よって一方で、行政レベルでの制度化ということを急がれねばならないように思われる。

■曽根原　理（東北大学）

「良いこと」をしていると理解していますが、遠くのことという実感は否めません。ただ、私が学会に来て、この部会に参加したのは、史料ネットの影響の（ほんの小さな）成果なのだという気もします。どういう形になるかはわかりませんが、今日ここで話を聞いたことが、何らかの形で生きていくことがあるかもしれません。

所詮、自分の立場で意識を持ちベストを尽くすしかないのかとも思いました（諦めではなく）。私の勤務する大学では、キャンパス移転の問題が持ち上がり、関連して、大学は市民の中にいる（ある）必要はないのか、という議論があります。史料保存に限りませんが、学問をどう社会と関わらせるべきか、考えさせられました。

■高埜利彦（学習院大学）

歴史研究者が史料保存のために心をくだくことは重要で、その意味から本日の企画は意義あるものと受けとめています。1996年７月下旬の近世史サマーセミナーにおいて、史料保存・整理についてのシンポジウムを行ないましたが、歴史研究者（若手）が地域保存を念頭に置いた工夫をあれこれ行っており、シンポは興味深いものになりました。20年くらい前のサマーセミナーでは、史料保存に関する認識は極めて希薄であったのとは大違いです。その点認識の上で進歩があり、若手研究者は頼もしいかぎりです。

もう一つ大切なことは、地域にとって史料が大切で、保存し公開するという考え方を、どうやって普及していくのかという点です。日本社会では、史料保存機関（アーカイブス）の普及が立ち遅れていますが、地域のアーカイブズが必要であることを、学校教育を通して次世代の常識にしていくことが必要ではないでしょうか。私の勤務する学習院大学では、総合基礎科目（旧一般教養）の一つとして「記録保存と現代ー世界と日本のアーカイブズ」という授業科目を、1996年度から開設しました。世界と日本の文書館（アーカイブズ）の現状や、史料保存の歴史、あるいは企業アーカイブズ、大学アーカイブズなどについて、総合講義を行なっています。繰り返しますが、歴史教育の問題として、史料保存を考えていく必要があると考えます。

■辰田芳雄（岡山朝日高校）

史料救出ご苦労様でした。史料についての歴史学者と市民とのズレの議論を聞いて、歴史を担当する教育者の責任という観点が必要なのかもしれないと思った。地域の史料を利用した授業の組立が行なわれれば、「ズレ」がある程度解消されるかもしれない。その際教育者も歴史学者でなければならないし、歴史学者も教育者にならなければならない。救出された史料は、教育の場に返されれば「ズレ」の解決の一歩となる。

■田中淳一郎（山城郷土資料館）

阪神大震災の場合、災害後の活動であった。他地域への展開を考えるとき、震災の前に何をするのかが重要だと思う。東京・東海など大地震が予想される地域において、平常時に歴史学徒として、どういうボランティア活動ができるのか考えてほしい。日常から、自治体内部の文化財担当者や資料保存機関との接触を増やすことに期待したい。

資料保存の責任を行政にあるとする議論は、行政の中にいる立場として、つらいところがあります。歴史資料保存とか地域復興とかに「住民の責任」という視点を入れていかないと、永続的な資料保存運動にならない様な気がします。行政が行なうということは、税金を使うということなのですから。

■寺田匡宏（大阪大学大学院）

大会でも広川禎秀氏が発言していたが、歴史学において震災そのものをどう扱うかという問題があると思う。これまでは、震災における歴史学の役割として、史料保存や歴史意識の問題を扱ってきたが、今後は、震災そのものをどのように検証するのか、という問題に、取り組む必要があるのではないだろうか。また個人的には、史料ネットの進めてきた史料保存活動と、市民の歴史意識の接点である震災の体験記録運動に関心があり、これをどう捉えていくか考えていきたいと思っている。

どちらかというと開催した側の立場なので、感想としては適切ではないかもしれないが、時間が足りなかったというのが正直な感想である。議論の方向として「なぜネットの活動が可能だったか」という問題に焦点があたり、深めていこうとした時に時間切れになったのは返す返すも残念。他日を期しても、もう史料ネットに関する議論は、同じ参加人数と同じ“期待感”では出来ないと思うが、是非議論を深める場を設